



沈澱藍 を 使って染める

令和元年11月分

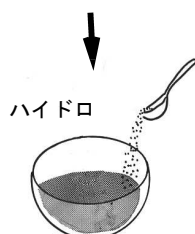
沈 澱 藍

今回は、第5回で実施した沈澱藍を使って染める方法を解説します。

ガイドブックの130頁で取り方を解説してあります石灰による沈澱法、または塩揉みによる沈澱法によって藍液が取れたでしょうか。先の方法では、一度に大量の液が取れるのが利点です。後者の方では、少量の藍しか取れなかった方に向いていると思います。では、これを使って引き染め用の藍建てをして、和紙に文字や絵を書いてみましょう。



湯煎で温めて、溶かす



(注)55℃位に冷ましてから入れる

沈澱藍の容器を見てください。静かに置いておくと、上澄みが透明、またはそれに近い色になっていませんか。容器を斜めにして静かに上澄みを取り除きます。底にはどろどろした藍が残っています。冬のみ、これを温められる容器に移します。30～50cc位用意します。この中に苛性ソーダを小さじ1/3（4～5片又は粒）入れます。（苛性ソーダは、粒または平たい小片なので、普通小さじで計ることはしないのですが、少量の計りがないときには便利です。皮膚や目に触れないよう気をつけて扱きましょう。計量器が使われる場合は、液の重さの0.7%とします。）鍋の中に水を入れて温め、沈澱藍の入った容器を入れて湯煎にします。（写真A-1）溶けましたら、火から下ろしてハイドロを小さじ1/4加えます。夏は、常温で結構で

す。

ハイドロは高温になるとガスが出ますから、苛性ソーダを先に入れて温め、取り出して55℃位に冷ましてからハイドロを入れます。

青かった液の色は、還元して緑色になります。(写真A-2) 温度が高いと黄土色になります。この液は時間が経つと酸化して還元が弱って色が悪くなりますので、早く使用してください。冬以外は常温で建てます。

和紙について

今回は、和紙に書きますので、和紙について解説します。和紙の原料は、コウゾ、ミツマタ、ガンピ等が主に使われています。ミツマタは、主に紙幣になります。ガンピは艶があり、滑らかで写経など文字を書いたり、絵を描くのにも適しています。一番多く使用されている和紙は、コウゾを原料にしてあります。最近はパルプと混ぜた物が出ています。藍染めに使用するには、水につけても溶けないコウゾ100%の紙を使用しなければなりません。より水に強くするためにもコンニャク糊を引いた紙を使用します。コンニャク糊についてはガイドブック25頁に解説してあります。

この糊の作り方で気をつけなければならないのは、少しずつ指でつまんでばらばらと振り込むように入れることです。泡だて器で混ぜながら20分溶かすか、ペットボトルに入れて振るようにして溶かします。その後1~2時間置くと滑らかな糊ができます。できた糊を手にとってみて、粒が残っているようだと置く時間が足りません。この糊は藍染めした後のすれ防止に使うこともできますし、藍染めの糸ののり付けにも使用します。手に色がつくのを防ぎます。糊に少量のオリーブ油を加えると艶のある糸になります。しかし、日持ちがしませんので早く使用します。

和紙は先に解説したようにコウゾ紙を使用します。板の上に乗せ、糊刷毛を使って満遍なく手早く引きます。乾かしてから、裏面を糊引きします。

沈澱藍の建て方

使い方によって底の濃いところを使うか、上の薄い方を使うか決めます。全体を浸し染めにするならそのままおきます。口の広いコーヒー瓶に入れ替えてみるとよく分かります。冷蔵庫に入れる必要はありませんが冷暗所に保管してください。

手描き・引き染め用の作り方

写真A-3参考

用意する物

- ・底の濃いところ 200 g
- ・苛性ソーダ 5 g
- ・ハイドロ 20 g

容器（ステンボール）に液を入れ、苛性ソーダを加え湯せんで温めます。

夏季は室温で、火からおろしてハイドロを加えて静かに混ぜます。

緑色になり青い泡が湧いてきます。

ハイドロは55℃より高くすると有毒ガスが出るので気をつけましょう。

ナイロンのはけ、たわし、スプレーなどを使って布や和紙に描きます。

浸し染め用の作り方

写真B-1参考

用意する物

- ・沈澱藍 200 g
- ・灰汁 2% (pH 12以上) <石灰を補充しても良い。>
(灰汁の変わりに苛性ソーダを使用する場合は水2%に20 g)
- ・ブドウ糖 120 g (又は、ハイドロ10 g)

ハンカチやスカーフ等を染めるには浸して染めます。それにはかなりの液量が必要になります。沈澱藍のみではどろどろですから、5～10倍のアルカリ液を加えなければなりません。

ガイドブック131頁の例Iの方法は灰汁を使用します。灰汁のpHが弱いときは消石灰を加えます。灰汁が手に入らない場合は水2%に苛性ソーダを溶かして使用します。

鍋に全部の材料を入れて60℃に温めます。かき混ぜて青い泡が湧き、液の色が黄色くなると、還元して藍建てができたしるしです。30℃以下に冷ましてから染めます。

染めているときの液色は、黄色みがかかった色をしています。もちろん表面は青く泡が浮いています。染めた布を取り出すと茶色、空気に当てると次第に青く変わります。液の色が全体に青くなると還元しなくなったことなので、再び火にかけてブドウ糖を加えて還元をさせてください。それでも染まらなくなれば、インディゴ分

がなくなったので液を捨てます。

沈殿藍から顔料へ

- ① 容器(ペットボトルなど)に入った沈殿藍の上澄み液を捨てる
- ② 代わりに水を入れてよく振り混ぜ、1日置いて、上澄み液を捨てる
- ③ これを4～5回行う
- ④ その後、容器から泥状の藍を皿に移して天日にて乾燥(乾燥し難い場合は、電子レンジで焦がさないように乾燥させる)
- ⑤ 乳鉢で細かく粉末にする

藍顔料から藍墨へ

奈良墨に使われるニカワの割合(松煙 10 : ニカワ 6)を参考にして冬季に行う(ニカワは腐敗しやすく、高温では固まらないので)

藍顔料 50 g

ニカワ 30 g (水 82 g で溶かす)

- ① 水で一晩ふやかしたニカワ(ニカワ 1 : 水 2.75)を湯煎にかけて溶かす
 - ② 顔料にニカワ液を少しずつ混ぜていく
 - ③ ラップなどに移し、練る
 - ④ 型(製菓用シリコン型、製氷器などで代用)に納めて乾燥させる(固まり難い時は冷蔵庫へ)
- 今回、藍顔料 100%の他に、松煙を1割、3割、5割混ぜたものを試作した結果、藍濃度が高いものは固まり難く、松煙の量が多くなるほど固まりやすかった

藍顔料から藍クレヨンへ

蜜蝋 80 g

油(サラダ油など) 40 g

炭酸カルシウム 大さじ3と1/5

藍顔料 33 g

- ① 蜜蝋を湯煎で溶かす
- ② 油、炭酸カルシウムを入れて溶かす
- ③ 藍顔料を入れて、むらなく混ぜる(この時直火で行うと、藍が焦げるので注意)
- ④ 型(製菓用シリコン型)に入れて固める

【同封したもの】

- 沈澱藍
- 参考見本（和紙に沈殿藍で字を書いたもの）
- 写真資料 1 枚（A 4 用紙に写真を印刷したもの）
- 参考資料 2 枚（「沈殿藍の建て方②」資料 1 枚、写真 1 枚）